

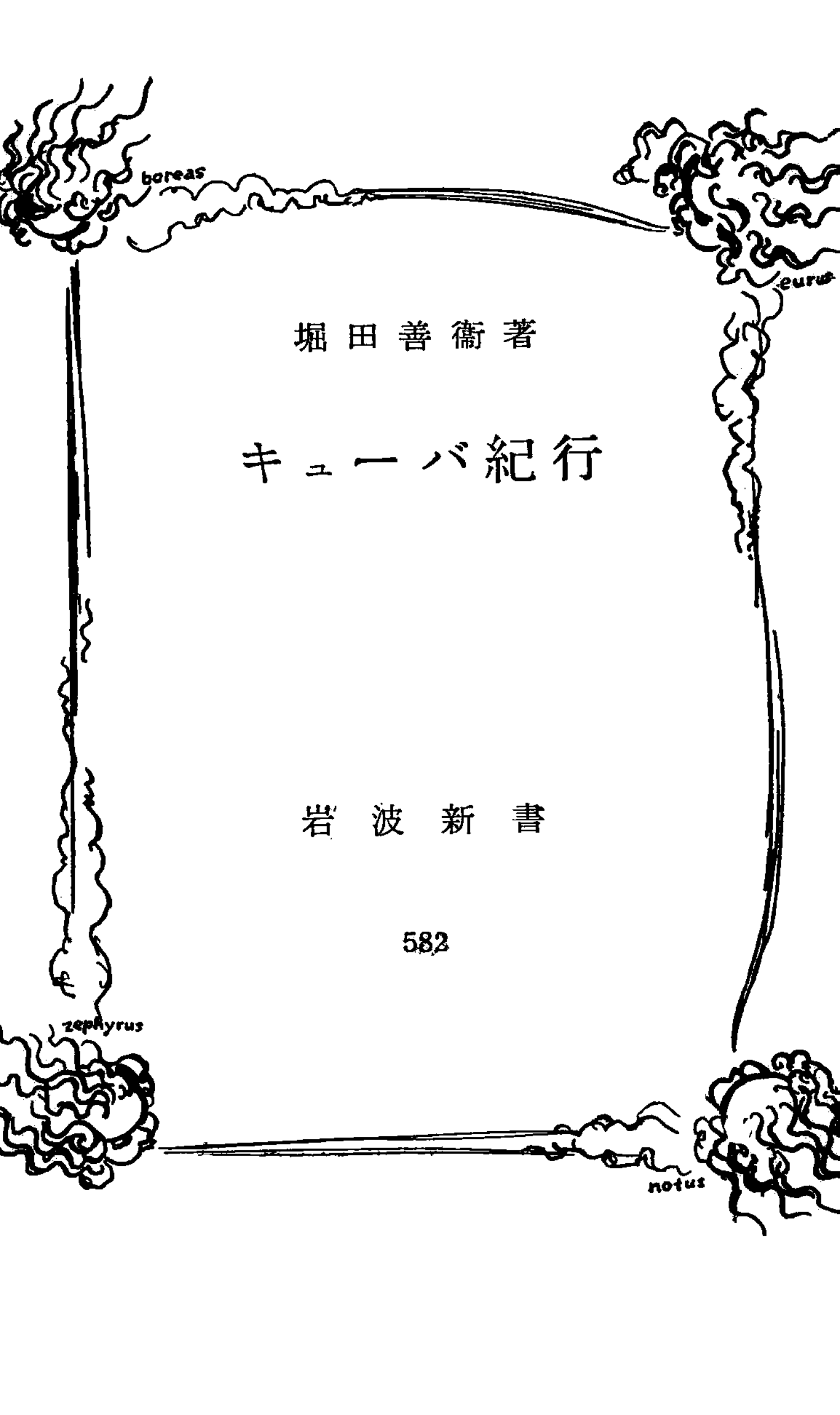
堀田善衛著

キューバ紀行



岩波新書

F 30



堀田善衛著

キューバ紀行

岩波新書

582

堀田善衛

1918年富山県に生まれる

1942年慶応義塾大学文学部卒業

専攻—小説，評論

著書—「インドで考えたこと」

「スペイン断章」(2点岩波新書)

「広場の孤独」「歴史」「時間」

「海鳴りの底から」「審判」

「スフィンクス」

キューバ紀行

岩波新書(青版) 582

1966年1月25日 第1刷発行 ©

1979年4月20日 第15刷発行

¥ 320

著 者 堀 田 善 衛

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・三陽社 製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

I 苦にがい砂糖・・・・・・・・・・・・・・・・1

- 1 いつもアメリカの軍艦が睨んでいる 2
- 2 インディオとスペイン人とアフリカ奴隷 7
- 3 「過去は砂糖のように甘くなかった」 23
- 4 砂糖根性と革命 29

II 植民地の宿命からの脱出・・・・・・・・41

- 1 植民地で常識は通用するか 42
- 2 たくさんの人がなぜ出て行ったのか 50
- 3 「単作産業国は自殺する」モノカルチユア 69
- 4 「大将や大佐などはウンザリだ」 79
- 5 コカ・コーラの味は忘れられるか 91

III キューバの内側から……………113

1 ポンコツ大行進 114

2 革命がいやだという人たち 119

3 魯迅の文学について 124

4 フィデル・カストロのヒゲの由来 141

5 SIN・MISERIA 150

IV シエラマエストラ山にて……………159

1 ベルティリヨン一六六番地 160

2 山上のゲリラ学校 164

3 浅沼稻次郎紡績工場 176

4 車の後押しをするカストロ首相 183

I
苦^{にが}
い
砂
糖



1 いつもアメリカの軍艦が睨んでいる

十年前、いや七年前でも——七年前の一九五九年一月一日に、フィデル・カストロ指揮下のゲリラの一隊がハバナに入って、その前日の大みそかの晩に、今日でも中南米やカリブ海では珍しくもない独裁者のバチスタ大統領が逃げ出したのであったが——とにかく、七年前でも、私はキューバなんぞというところへ行こうなどとは、行くことがあるかもしれないなどとは、夢にも思っていなかった。

まして、私のキューバ——土地の人たちはクーバと発音するのだが——についての知識といったら、大正の末から昭和のはじめにかけての、まことに「ロマンチック羅曼的の致」おもむきをもった作家でお医者さんの木下杢太郎氏（医学博士、太田正雄）の手になる紀行文集の『そのくにそのぞくのき其国其俗記』にある文を戦争中に読んだことがあるという、せいぜいそのくらいのものであった。あとは、御同様、アメリカ経由の新聞記事である。

木下杢太郎は、実は作家としてではなくて、一人の医学者として「ヌウヨーク」からキューバ——いや「クーバ」へ行った。時は一九二二年七月、目的は、「皮膚が五色になる」という奇

怪な皮膚病、それは「第一には『ピントオ』とも『カラテ』とも呼ばれる皮膚病を其地で観察しよう」と欲したからであつた」そうして「第二には皮膚炎を起すやうな熱帯植物の採取の爲めであつた」というわけで、そういう皮膚病観察行を、この作家にして医学者なる木下氏は、「クウバへ往つたといふ動機が甚だロマンチックなものであつた」と言っていた。だから、東京のキューバ大使館から、其国^{そのくに}へ行ってみないかというさそいをうけたときには、フィデル・カストロと彼らの若者たちによる革命のことなどよりも先に、第一に妙に皮膚がむずがゆくなる感じがし、ついで、木下氏のこの文を読んだときに、医者というものは、妙なことを「ロマンチック」と思うものだな、と考へたことを思い出した。

本当に、私はキューバなんぞというところへ行こうなどとは、思つてもいなかったのだ。そうして、この思いがけなさというものを、少々無理して拡大してみると、そこに、現代世界のなかでの、とりわけて北方の巨人であるアメリカにとってのキューバ革命というものの自体の思いがけなさ、あるいはまた、いわゆる「キューバ危機」あるいは「ミサイル危機」といわれた一九六二年一〇月の、全世界の人々のうちの少からぬ部分が、この小さな島国のおかげでまったく思いがけずひやりとせねばならず、かつは平素思いがけもしなかった、カリブ海のなかの「キューバ」と呼ばれる島を注目しなければならぬという羽目におちいった、そういう現実が不気味に浮び上つて来るかもしれないのだ。

それをやたらに、思いがけない、思いがけないなどと言ひすぎたのでは、キューバに住む七

百万の人々に、おそろくは礼を失することになる。キューバの革命は、キューバの人々とっては、実に思いがけないなどということではまったくなくて、それは本当に二万余の血で成り上がったものであった。そこが、まず第一に、ラテンアメリカの政治的年中行事みたいな騒ぎとはちがっている。

けれども革命というものが、外部のものにとつてはつねに、ある思いがけなさをもたせて見えて来るものなのかもしれないが、その当事者にとつても、事が思いがけない方向に発展することだっているのだ。この革命の魂であるフィデル・カストロ自身、かつて「人はわれわれを共産主義者と呼ぶ」といつて怒っていたことがあるが、今日では彼とその指導部が社会主義革命の完成をめがけて努力していることは、これはアメリカ人ならずとも認めなければならぬ。だからこそ、北方の巨人であるアメリカは、経済封鎖という面倒なことをしなければならなくなっている。

ハバナの町は、スペイン風な狭い迷路だらけな旧地区と、マイアミ風な高いビルやホテルなどの集った新しい地区と二つにわかれてゐる町だが、大通りはいずれもさまざまな街路樹でふちどられている。インド菩提樹や火焰樹フラムボイヤンが多く、この火焰樹フラムボイヤンにはナギナタの刃ほどの実がぶらさがっている、花は強烈な赤ばかりではなく、白や黄色までがあり、また大通り中央の遊歩道には、これらどきつい赤、白の花をもった夾竹桃が植え込まれ、芝生は紅紫、黄色などのクロト

ンの若木、千歳蘭サンセビエリアや桂樹、わが国の五月きつきによく似た赤い花のアマポーラが咲きみだれ、家々の白い壁にはブルーゲンヴィリアの血紅の色がぶちまけられている。それに花々の赤、紅、白、黄だけではなくて、いずれにしても大振りな葉の緑もまた洗い流したように新鮮で、その色彩のさまざまが家々の白壁に映え、空の完璧な紺碧におおわれている。そうしてその背後には、灰色に妙なふうに紫の色をおびた幹の大椰子樹と、バナナの木がそびえたっている。ハバナはマリアミとスペインの旧都市とがごっちゃになったような、変化に富んだ町であつた。そうして、そういうふうな変化と派手さ加減そのものが、実に途方もなく困難かつむずかしい事情をひめているのである。

私のとまつたホテルは、ホテル・ナショナルという近頃のマイアミ風なものではなくて、いわば古典的ながつしりしたつくりのものであつたが、そこでの最初の朝食の、その食堂にまづ驚かされてしまった。午前中だというのに照明をつけなければならぬ、前方にステージとバンドのための席のあるキャバレである。サーヴィスはお義理にもよいとは言えない。一時に三百人から四百人ほどの外人客を迎えたせいであつたかもしれないが、ヘッド・ウェ이터は大仰なエンピ服を着、ウェ이터たちはとてつもない赤や青の制服を着込んでいるとはいふものの、一見して客さばきになれていないことが見てとられる。食後のパイアの皿を平げてこのキャバレでの朝食をおえ、海の見える廻廊でおそろしく濃いキューバのコオフィを飲みながら、明るい、あくまで青いカリブ海の水平線を眺めていると、水平線の一点に一隻の船がいること

に気付いた。領海すれすれのところにかんばっていると見える。

かなりに大きい灰色の船がいて、それがいつまでたっても同じ位置にいて動かない。私はその一隻の船をじっと注視しつづけた。廻船問屋の倅として生れ育った私は、船型というものについてはかなりに敏感であり、相当程度に通じているつもりであるが、その知識が私に、あれは商船ではない、と告げるのである。

商船でないとすれば、あの動かぬ船はいったい何だ？

私たちにしばらくのあいだ通訳としてついてくれることになった若い日本人二世のルイス・サトウ・サトウ君が、けろりとして言うてくれた（サトウ・サトウと二つかきなるのは、はじめのサトウが父称、おしまいのサトウは母称だから）。

「アレハ、アメリカノ軍艦、スペイン語でぶろけお、日本語デナントイイマスカ、ぶろけおニ来テイマス」

「ぶろけお……、ああ封鎖か」

アメリカの軍艦、おそらくこの艦影は、一九六二年秋の経済封鎖いらい——それは侵略の一種であり、アメリカ政府自体が「これもまた戦争行為の一つである」(“an enforced blockade which would still be an act of war”, Department of State Publication No. 7690)として認めているものであるが——ずっと二六時中ハバナ沖にかんばってその砲をハバナに向け、かつハバナに出入りする船に向けつづけているものである。

この小さな島国の革命が、そうしてその革命の社会主義への進展が、社会主義大反対のアメリカの鼻先、それはアメリカ流に言えば、アメリカから、フロリダ半島の海軍基地キイ・ウエスト港からたった一四〇キロの「アメリカの裏庭」——表庭はどこなのだらう？——で起った、起らざるをえなかった、そうしてそれが社会主義へと進展せざるをえなかったという事態、しかもその思いがけなさに、どうしてもなれることも許すことも出来ぬというアメリカ、またキューバ自身にとってみれば、大敵の面前で、しかも周囲の中南米には革命の友人は沢山いるものの、公けの関係としてはメキシコ一国を除いてすべての国に断交を申しわたされ、また社会主義諸国の支援をうけているというものの、敵意の海のなかで、いわば一国社会主義の建設をこの二十世紀後半に強いられるという、こういう事柄のなかにも、現代世界というものの思いがけぬ構造の一部がむき出しに露出しているというものであらう。

2 インディオとスペイン人とアフリカ奴隷

ところで「ラテンアメリカ気質」ということが言われる。そういうことばで何が言いあらわされているか。ここで仮りに、キューバへ行く以前に私自身がそのことばでもって勝手にでつ

ちあげていたものを、カリブ海周辺に限って正直にならべてみるとするならば、たとえば次のような代物しろもののごちゃまぜということになるうか。

すなわち、まず呑気で陽気であること、ナマケモノ、音楽好き、踊り好き、チャチャチャ、ルンバ、コンガ、ボサノバ、パチャング、カリブソなどの音楽のリズム、カン高くひびきのいいスペイン語の発音、それから視覚に訴えるものとしては、青い青い空、パステル・グリーンのカリブ海、椰子の木、まるでカラーフィルムカラーフィルムの広告のためのような風光、大きな帽子のソンブレロ、男はスペイン風のヒゲ、そうして女の子はオッパイが大きくて、お尻もまた立派で、部屋へ入って来るときには、まずオッパイから入って来て、出て行くときにはお尻がなかば永遠にのこっている、そうしてあたりまえのことながら男は絶対に女好きで……、なんとも仕様のないイメージというものであるが、正直なところこんな程度のものであった。

これでは気質というところまでも、言うまでもなく行きはしないし、何を言ったことにもならないにしても、そこに少々無理をして何かしら共通の、一つのをさがし求めてみるとするならば、それは、ある種の、なんとはない頼りなさ、どっしりとした深くて大きい根のない感じ、精力はあるが本当の精はない感じ、そういうものになりはしないだろうか。

これまでに私は、世界のさまざまなところを旅行してみ、一つの偏見を育てあげていた。それは、欧亜大陸にあったような中世紀、あるいは封建遺制というもののない、その遺産をもたない土地に行ってみてもつまらないだろう、というものであった。ということになると、

新世界、新大陸といわれる南北アメリカがごっそり抜けおちてしまうということになる。自分ででっちあげた偏見によって自分自身がしばらくしてしまふという結果を来たしていたものである。さればキューバもまた中世、封建遺制というものをもたない、一四九二年にコロンブスによつて発見されたスペインの出店、植民地であつた。しかも、中南米には多くのこつているものもとの住民、土人^{インディオ}というものは、まずいのである。歴史はせいぜい五百年で、スペインからの独立以後（ということとは「独立」以後は、今度はアメリカの植民地同様のものになつたということだが）、わずかに六十二年なのだが、この五百年の以前のことにはまるでわからない。こういう妙な具合の歴史しかない国というものを私は原則として好かないし、そういうものに私たちはなれてもいないのである。

がしかし、もともとの住民は、ではどこへ行つてしまつたのか。マヤ、アズテック、インカなどの高度の文明を築いた古代民族の、そのはしくれでもがこの豊かで、比較的にしるぎやすい島にいなかったということはないだろう。泉靖一氏の研究によると、かつてカリブ族、シグアヨ族、チブネ族という、われわれの「アジア大陸と関係の深い」人たちがいたということだし、キューバの作曲家オーナ氏の代表作、ルンバの「シボネー」によつてシボネーという原住民がいたという話を聞かされていたが、泉氏の「インディオ人口と他人種との関係」という表によると、アンティル諸島ではインディオ人口（一九四〇年）は「ナシ」となっている。まったく

ひどいものだ。

ひどいものだ、とはいふものの、一体どこへ彼らは行ってしまったか。ハバナ州の東どなりにマタンサス(MATANZAS)という州がある。この州の首都であるマタンサス市は、ひろびろとした入江に面した、ゆるい傾斜の丘にたつ、まことに美しい町である。ハバナからこの町へ車で入っていったとき、私はそのとき通訳として来てくれていたゴンサーロ君という名の若者にたずねた。

「マタンサスとはどういう意味だ？」

「そいつは、^{マサカー}虐殺という意味だ」

若者は齒切れのいい、英語というよりも米語で、massacre と発音してくれたものだったが、しゃれではなくて、まさかと思ひ、もう一度聞きなおしてもマサカーにはちがひもなく、とにかくここあたりがキューバでもいちばん地味のよいところだったので、かつてインディオも多かった。けれども、五百年前からスペイン人たちが植民して来て、インディオを使用しようとした。彼らは魚をとったり鳥をつかまえたり、掃除をしたり、そういう召使的な家庭労働には向いていたが、農業労働者としては役にたたなかった。むしろ邪魔になる。そこで、こと面倒なりというわけで、^{マサカー}皆殺しに^{マタール}虐殺してしまった。ひどい話だが、それがかつての歴史の事実だったのである。のこったインディオたちはのがれのがれて、結局は不毛な、マタンサス州南部からサパタ半島にかけてのシェネガ湿地、泥炭になるもう一步手前の、地面も水も、もろ

ともに真黒な沼沢地へ追い込まれてしまい、そこで果ててしまったものらしい。そうしてこの広大な沼沢地には、いまはワニが数万匹も生活をしている。一九六一年の四月に、アメリカの中央情報局（C・I・A）の直接指揮の下に乗り込んで来た千五百人の反革命軍も、この沼沢地帯の入江、豚^{パイア・デ・コチノス}の湾^湾まで来てここで若い民兵たちに退治されたものである。

ところが、この不毛な沼沢地に追いつめられて潰滅してしまった先住民であったインディオたちを悼みかつ記念して、グアマという広大な湖（沼というべきか）の、労働者や観光客のための遊園地的な休息、観光地に、セメント彫刻の群れによる、インディオたちの生活の再現があった。その彫刻によると、まったくアジア的な顔をした男女のうち、男はチョンマゲのようなふうに髪を結っていたが……。そうして、ほんの指折り数えられるほどの、とにもかくにもいのちながらえて生き残ったインディオは革命政府に保護されて、土偶のようなものを作って売っていた。そうして、その土偶を見て、やはりアジア人種の一人である私は眼を瞠^{みは}ってしまったものだ。というのは、その土偶の一つが、まるでわれわれの古代彫刻の一つである埴輪にそっくりなのだ。

そっくり、と言ったのでは間違いが起るかもしれないが、素朴で稚拙、二つひっくりくるめてアルカイックということばがあたるような、三角形の胴体に、下ぶくれの顔がついていて、その眼が、おそらくはヘラで横に一筋、さっと刷いただけの、光りの加減によっては泣いているかとも見え、かつは仄かに含み笑いに笑っているかとも見える微妙な、まことにアジア的な、い

わば埴輪的なまでに微妙な表情をもっていた。

しかし、とにかくにも、インディオは殺戮^{マタール}されて、滅びてしまった。

そうして、そのあとに乗り込んで来たものが奴隷制度と、これを使う植民地支配であった。しかも植民地としてのあり方は、独立によってスペインのそれから解放されたかと思う間もなく、強大なアメリカ資本主義によってとって代られたという次第であった。

たとえばキューバや、またその他の中南米の植民地が、アメリカにとって代られる以前の、西欧文明一般との関係がどんなものであったかということは、次の文章に明らかすぎるほどに明らかであろう。西欧文明の応接間だけではなく、その台所のことも、多少知っていても損ではあるまいと思われる。

「アンティル諸島における、スペイン領ではないヨーロッパの植民地には（英、仏、おまけにオランダ、かてて加えてある時にはデンマークまでが出張^{でば}って来ていた——筆者）、はじめは奴隷農園というものはなかったのだ。自由な農民と、年季奉公をおえて自作農になった農民社会があった。ところが、こういう社会が、実におどろくべき早さで巨大な奴隷農園となり、奴隷売買がさかえ、農園の主要産物に対するヨーロッパの市場が確保されるや否や、資本は流れ込んで来た。けれども、人間というかたちをとったコストはおそろしく高いものについた。その代価は、まず追い出されて島から島へとさまようことになった自作農、それからアフリカからつれて来られた奴隷たちによってあがなわれなければならなかった。アラワク・インディオや、（スペイン